
JOY

中村真央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョウ

【Zコード】

N1013Y

【作者名】

中村真央

【あらすじ】

事故で恋人を亡くして10年孤独に暮らしている浅井。10年目のクリスマス間に慌しく運命が転がり始める。可愛いすぎる強引で横暴な天使に出会つてから。

白い天井

白い天井が不思議だと思った。

自分の部屋じゃない。

天井から下がったベージュのカーテンに囲まれている。ぐるりと見回すと、ベッドの横に母親がいた。

そんなはずはない。大学進学で故郷を離れて半年が過ぎている。これは、夢だ。浅井はそう思った。

「あら！ 起きたの！ 看護婦さん呼ばなきや！」

枕元に垂れているブザーを押すことにも気付かず母はザッとカーテンを開いて廊下に走り去った。

病院なのだと浅井はやつと気付いた。

だけぞぞつしてこんなところに、と長い髪の毛をかきあげようとして、頭の包帯に気付いた。

包帯？ 頭に？ 何？ これ？

浅井が逡巡している間に若い女性看護士が飛び込んできた。

「あら！ よかつた！ 浅井さん！ あなたは外傷も少ないから意識だけが心配だったの！ 良かつたわ～！」

わからない。わからない。浅井は頭を振った。

「うん、そうね、彼氏は残念だったけどね、あなたは彼に助けられたんだからね、頑張つていかないと…」

待つて。

何この夢？ なんでこんな夢みてるの？

「ああ、だめよ。あなた頭打つたんだからあまり動かさない！」

看護士に両手で頭をつかまれた。

「今先生来るから、今の状態教えてね。頭痛いとかはないのよね？」

つかまれた頭で頷いた。

医師が現れ、名前は何だとか今日は何日だとか「ここのはどい」だとか、バカみたいな質問をされてバカみたいなに答えた。

バカみたいな夢だ。きっとそれが表情に出たのだろう。

「バカな質問だと思ってるんだね。じゃあ大丈夫だ。よかつたよかつた。あれだけの事故で奇跡だよ」

医師は浅井の膝あたりの布団をポンポンと叩いて、看護士と共に出て行つた。母もその後を追つて出て行つた。

あれだけの事故

彼氏は残念だつたけどね

いくら夢でもひじかれる。

どうして私がこんな夢を見るの？

ああ、きっと先輩が買ったばかりの車がスポーツタイプだから心配なんだきっと。

そう思つてゐるくせに、浅井はベッドを降りて椅子の脇に置いてあつた汚れた自分のスニーカーを履いて、病室を出た。

どうせ夢なんだから。そう思つてゐるくせに、鼓動が速まる。

エレベーターで1階に降り、施設全体の案内図を見つけた。そして、それを地下に見つけた。

いないことを確認するんだ。

いたつてどうせ夢なんだ。

混乱する頭で地下に降り、その場所を見つけて小走りになる。

どうせ夢なんだ。

一つずつドアを開ける。

知らない人が顔を向ける。礼をして閉める。それを繰り返す。ほり。バカみたいだ。全部この繰り返しだ。

そう思つてまたそつと開いた扉の向こうへ、

先輩のお母さんがいた。

お父さんがいた。

弟がいた。

先輩のお母さんが立ち上がり、おおおお、と喉の奥から溢れた声を両手で押さえ、また椅子に座り込んだ。

お父さんはおじぎをした。

先輩によく似た弟は、そのまぶたを真っ赤に腫らして、また白衣を被せられた顔をじつと見下ろした。

体は、大丈夫ですか。本当はおちりにすぐにお見舞いに向かわなければと思ったのですが、

この通り、龍がね、申し訳ないけどお見せできる顔じゃないから布は取れないんですけど、もしかしたらここでお別れかと思いますのでね、

お父さんがそんなことを語つている。
どうしてここまで具体的な夢なんだろう。

近寄つてみた。

布は取れないって言つてたけど、取らなくても頭中包帯でぐるぐる巻き。きっと顔も包帯でぐるぐる巻き。

先輩、車の運転気をつけないとこんなことになっちゃうんだから。ああ、警告の夢なんだ、きっと。

耳だけが見えていた。

少しだけ傷がついた耳。

この耳は、先輩の耳だ。

私はよく知つている。

何度も何度もつまんやり囁いたり口をつけたりした。

先輩の耳の形だ。

先輩。

これは、この人は、先輩。

やつと浅井は、確認した。

白いシーツで覆われた大柄な体。

これは確かに、先輩の体。

先輩の体が、靈安室で線香の香りに包まれていた。

その後の記憶がない。
また病室で目が覚めた。
まだ夢だと思っていた。

夢じやないのだと気付くまで、三日かかった。

夢ではないのだと、先輩が死んだのだとわかった時に、浅井は
声を失った。

それも惜しくはなかつた。
先輩を失つたのなら、惜しいものなんか何もなかつた。
自分の命もいらなかつた。
何もいらなかつた。

全ていらなかつた。

5時半の終業間際、鳴り響く電話を誰も取らない。クリスマスも近い今日は金曜日で、みんなこの後の予定もあるのだろうが我慢比べでもしているように、恐らく何のデータも入力せずにキー・ボードを叩いている。

結局客先からのクレームを処理したばかりの浅井が受話器も戻さずにその外線を取った。

「お待たせいたしました。」

の言葉も言い終わらないうちに、大声で捲くし立てられた。

『いつになつたら持つて来るつもりなんだ!とっくに5時回つてんだろうがっ!』

浅井はその大声に受話器を耳から離して、右手で額を押さえた。

「失礼ですがお客様・・・」

『大森だ!大森!千種区!』

千種区・大森様・・・見覚えがある・・・とディスプレイに出荷予定を表示してスクロールする。

あつた。設置予定明日午後5時。ビューティーサロン・フォレス

トイン。

『明日の開店に間に合やあいいと思って5時にしたのによ、今何時だよ?他の業者はもうとっくに引けてんだぞ!』

明日のオープンだ?

「申し訳ありません、ただいま確認いたしますのでもう少々お時間いただけますでしょうか」

『さつさとしろよ!』

『はい!すぐに!』

耳に受話器を挟んだまま浅井は通話を切り、ディスプレイに表示されている納入業社の社長の携帯の番号を呼び出し、繋げた。相手はすぐに出た。

『はい加藤』

「本社の浅井です。お疲れ様です。社長今どこですか？」

『ん？ ヤード戻ってきたと』

「明日のティーサーバー、もうトラックに積んでますよね？」

『ああ？ そうだな。明日はこれともう一件だから積んである』

「今から出でもらいますか？」

『ああ？ …』

「もう一杯やつてます？」

『やつてないけど、今日丸一日設置と撤去で俺ずたぼろだよ？』

「すみません。明日のティーサーバーが今日だつたんですね」

『知るかよ。そつちのミスだつが』

「明日オープンの美容院なんです。あとティーサーバーだけ搬入がないらしくて」

『だからそつちのミスだつて！ 俺はもう一杯やつちやうよ！』

「じゃ、山下君は？ 水野君でも。ティーサーバーの設置なんて一人でも出来るじゃないですか」

『おお！ そういうこと言うならあんたがやれよ』

「じゃあやります。迎えに来てください。送つても行つてください

よ。それが社長の仕事じゃないですか』

『俺の仕事は明日請けたもんだつーの！』

「わかりました。私がタクシーでそちらまで行つて、トラック運転して千種区まで行きます！』

『あんたトラック運転できんのかよ？』

『普通免許はあります。ペーパードライバーだけど』

『そんなのにつづのトラック貸さね～よ！ わかったよ！ 俺が行くよ

』

「本当にですか！ありがとうございます！今度大型2件決まりそ�な
ので必ず加藤設備に回します！」

『おっ・・・お、おひ。まあ、これから出るとなると7時頃になる
けどいいのか』

「すぐに出でいただければ！何とでも言い訳しますから！ありがと
うございます！お気をつけて！」

『つたく・・・かなわん。急いで行くわ』

「ありがとうございます！先方にもお知らせしますね！」

また受話器を肩に挟んだまま、セッキディスプレイに記録された
千種区の大森の番号をダイヤルする。

「お待たせ致しました。星川商事です。本日納入予定のティーサー
バーですね、前の現場が遅れましてまたこの時間渋滞に巻き込まれ
てまして、そちらに向かってはいるのですが遅くなると連絡があり
ました。』報告が遅れて申し訳ありません！」

『あ、ああ？何、それで結局何時になるの？』

「ええ、大変遅くなつてしまつて申し訳ないのですが6時半までに
はと・・・」

三十分サバ読んだ。

『一分でも遅れたらつつかえますぞ！』

「連絡の遅れた私どものミスですので、なんとかお許しいただけれ
ばと存じます。ドライバーが頑張つてそちらに向かっておりますの
で」

『そんなのは仕事なんだから当たり前だ。まあいいわ。6時半な
「私も完了報告があるまでここで待機してますのでお願いいいたしま
す』

『別にあんたには関係ないだろ？が』

『私のミスですか』

『ふん。別に、受け取るから〇』は早く帰ることだ。今どき危ない
んだからよ』

「ありがとうございます。それではお願ひ致します」

『はいはい。あんたは帰れよ』

「ありがとうございます。失礼いたします」

そしてやつと電話器を置いた。

そして、机につづつした。

今的一件で何日分かの仕事をしたよつたん気分だ。上手くいったんだろうか。ミスはなかつただろうか。

浅井は会話を始めからリピートしてみた。

「・・・加藤社長、つて言いました？あの社長の時間から動かしたんですか？」

後ろから男子の声が聞こえる。

「電話一本での怖い社長動かせるのつて浅井さんぐらしきませんよねつ！」

女子の声も聞こえる。

つづつした浅井がゆらりと体を起こし、後ろを向いた。

加藤社長とは別の外注業社の社員の大沢と、浅井の後輩事務員の栗尾が並んで立っていた。

短い茶髪のイケメン大沢と、お姫様のように毛先をカールした栗尾がすっかり帰り支度で並んで立っていた。

その姿になぜか浅井は内心ムラツと怒りが沸いた。ただ反射的にムツとしただけなので理由にも行き当たらず、少し顔を傾げて仕事に戻ろうとした。

「その、加藤社長の搬入終わるまで仕事終わんないんすか？」

大沢が訊ねてきた。少し不思議でまた振り向いた。大沢とはそれほど親しくはないのだ。

「今日の飲み会は、浅井さんも参加するつて聞いてたんすけど、」「え？ 今日だつけ？」

浅井は栗尾に視線を動かした。そういえば事務員全員と外注業社の社員有志が集まる会に参加すると申し出ていた。事務員全員と言つても十数人しかいないので、一人だけ欠席とは言い辛かつただけだつたからいい理由ができたと思つた。

「ああ、ごめん。私ヌキでやつてもらえた？ あんまり早くは終わらないと思つから」

元々乗り気の飲み会ではないし、会費も前払いしてあるから迷惑は掛けられないはずだ。

「なんだあ。残念だなあ」

大沢が社交辞令を言つてくれる。

「しようがないですよねー！ 事務員で一番責任とれるのつて浅井さんですもんね！」

栗尾が髪の毛をふわりと動かし、可愛い角度で大沢を見上げた。

その瞬間、気付いた。

「・・・栗尾さん、あなた明日の設置確認をお客様にとつてなか

つたのね」

さつきのティーサーバー設置の、業務責任者印は、栗尾になつて
いたのだ。

「は？」

まだ栗尾は可愛い角度を変えない。

「お客様は今日搬入だとばかり思つていたそつよ。あなたは確認の
電話を入れる責任があるわよね」

「あ、え～、つと、きつとお話中だつたと・・・」

「加藤社長が出てくれたからなんとかしてもらえたけど、」

「でも、それつてお客様の勘違いが一番悪いんじやないんですか
？契約は絶対明日ですもん！」

「明日オープンの美容院なの。あなたそのオーナーにそんなこと言
えるの？」

「浅井さんなら言えますよ～！」

栗尾がキャラキャラと笑つた。

言わなきやよかつた。さらにむかついただけだつた。浅井はため
息をついて椅子をくるりと正面に戻した。

直後にカツカツと高いヒールの歩く音が響いた。背の低い栗尾は
高いヒールのブーツを履いている。

ピンクの短いファーのコートを羽織つて。

ブランド物のハンドバッグを腕に掛けてイケメン大沢と街を歩く
のだろう。

あ、そうだ。きっとこの子は大沢君に氣があるんだ。ああ、それ
でこんな妙なメンツのコンパなんだわ。ふうん・・・。

浅井が頬杖をついて頷くと後ろから声がした。

「あの。仕事終わつてから合流すればいいんじゃないですかね？」
驚いて振り向くと、まだ大沢がいた。

「あら。気使わなくていいわよ。私ももう疲れちゃって飲みたい気分でもないし」

「でも、」

「いいわよ別に。私のための会でもないし。ほら。待ってるわよ」
含み笑いで一瞬だけ視線を出口にいる栗尾に向かた。
「また今度全社で忘年会があるじゃない。その時にね」
また椅子を戻して、浅井は右手をひらひらと振った。

楽しい飲み会など一度も経験はない。常に退屈なだけだ。それが一度減ることは全然残念などではない。

笑顔を向けても分かってもらえないだらうから浅井はそのままキーボードの操作に戻つた。

「じゃあ・・・失礼します」

大沢のスニーカーがキュッと音を立てた。

ドアを開ける音がした時にちらりと一人を見送ると、街でよく見る似合いのカッフルに見えた。

黒いダウンジャケットの中からパークーのフードと裾を出し、山でも登るようなごつい靴を履いている長身の大沢と、髪の毛クルクルのコートフワフワな小さい栗尾。

ああ、結構なことですね。いよいよ寒くなつてクリスマスですもんね。

寒くなつてクリスマスが来て年末になり仕事納め。

私はそれまでは馬車馬だわ。

結局色気のない方向に思考を飛ばし、ため息をつく浅井だつた。

課長と浅井しかいなくなつた事務所に外線電話の音が響いた。

『おう、加藤だけど今現場終わりました』

電話を取つた浅井が驚いた。

「もつ? まだ7時前ですよ?」

『おお、意外に道も空いてたし密がさ、設置手伝つてくれたからな』

「うわ、そんなことしてもらつちやつたんですか?」

『せりそつだる。本来明日の予定で契約書にも印鑑ついてんの確認わせたからな』

「うわ・・・そんなことまでしちやつたんですか・・・」

『あつたつまえだる。悪いけどよ、こつちだつてわざわざ行つてやつた立場でだよ? いきなり喧嘩越しで命令しやがつてよ』

「はあ・・・」

『いへりお客様でもだな、謝るべきといひは謝るのが筋つてもんやろが! つて怒鳴つてやつたよ。契約書持つてきて納入期日を確認してみろや! つてな。ははつ。青くなつてたよ。笑うなあ』

「笑つたんですかあ・・・」

『せりそつやる。こきなり空氣抜けたみたいに萎んじやつてよ。ま、こき使つてやつたから勘弁してやるわ』

「・・・加藤社長、やつぱりそんな立場じやない氣がしますけど・・・」

『そんなん知らんよ。後はあんたの仕事やひ。じや、やつこつ! ひとで。お疲れさん』

嘘^{～～～～}。お客様をこき使つたんですかあ^{～～～}・・・。

浅井は顔を右手で覆つた。

確かに、契約は明日搬入になつてゐる。勘違ひしたのはお客様だ。お客様なのだ。こきいう対応が一番難しい・・・。

お客様は神様だ。勘違いしたとしても神様だ。謝らせるのが筋ではないのが商売なのだ。

悩んでもしようがない。ひとつと自分の仕事を終えよう。

浅井は、千種区の大森にダイヤルした。

「お世話になつております。星川商事の浅井と申しますが、」

そこまで言う前に、大森が電話を落としたかお手玉したかで雑音が入つた。

『あつ、あ、星川さんね、あの～、契約ね、明日だつたみたいで申し訳なかつたね、』

「いえ、今日は準備はしてありましたのでそうおっしゃつていただなかくとも大丈夫だつたんですよ。こちらも確認を怠つてしまつて失礼いたしました。こちらのミスでしたので無事設置できて安心いたしました。また何かご縁があればその時はよろしくお願ひいたします」

『あ、ま、そう言つてもらえると助かるわ。ほんと、悪かったです。次何かあつたらほんと、声掛けますんで』

「ありがとうございます。設置のお手伝いもしていただいたようで恐縮です。ありがとうございます」

『いやいや、当たり前だし』

『明日のオープン頑張つてくださいね。おめでとうございます』

『ああ、ありがとうございます。千種区ですから、もしよかつたらいつも』顔に

『あら。ビューティーサロン・フォレストインですね。機会がありましたら』

『ほんとにね。お待ちします』

『はい。今日は遅くまでご苦労様でした』

『ああ、あなたもお気をつけてお帰りください』

『ありがとうございます。失礼します』

また浅井は、だつと机に突つ伏した。疲れた。

逆ギレするタイプのお客様じゃなくてよかったです。ほっとした。といふか、同じく商売人なのだ。最後は宣伝までして。
くすっと笑って起き上がった。千種区のビューティーサロン・フォレステイン。行かないだろ？
ふうとためいきをつき、課長に仕事を終えた報告をし、更衣室で着替えて会社を出た。

寒い。襟元を合わせる。もう一、二月なのだ。

12月に入れば街中はクリスマス一色で、イルミネーションが華やかだ。

長い黒髪を一つに縛り、黒いロングコート、黒いローヒールで歩く自分が異質な気がする。

そう思いつき、浅井はくすりと笑った。

ビューティーサロン・フォレストイン。ステキな屋号の美容院ね。私は近所のおばさんが一人でやっている屋号も覚えていない美容院に半年に一度くらい、長さを揃えてもらひ程度しか髪はいじらない。

先輩が好きだつて言つた長い髪だからね。

だからクリスマスも関係がない。楽しいイベントじゃなくなつてもう10年も経つ。

特に、一生誰も愛さない！とか、独身を通す！とか、強い決意があつたわけではないのだが、そういう予感はあつた。あれ以上誰かを好きにはなれないだろつと思つ。それでいい。

この先ずつと一人でも困ることはない。貯金もしているし保険にも入つている。それ以上はこのご時世、考へても意味がない。そう考へて浅井は顔を上げて改めて周囲を見回した。

それでも年々街は華やかになつていく気がする。ショーウィンドウの中もものすごいことになつていて。

赤いミニのサンタ服を着たマネキンの周りを、本物の子犬が小さなソリを振り回して走り回つている。

嘘・・・と驚いて浅井はウイングドウに近づいた。同時に

「あつ！」

と、甲高い声が聞こえた。

直後に誰かが肩に強くぶつかってきて転びそうになつたが、なんとか堪えた。

が、足元でパリンと音が聞こえた。

また、あ、と甲高い声が聞こえた。そしてその声が続けた。

「・・・「めんなさい・・・メガネ・・・踏んずけちゃつた・・・」

「

少しの間、浅井は呆然とした。
裸眼の視力はほとんどないのだ。

「ごめんなさい、どうしよう・・・」

浅井の足元でメガネの残骸を拾つているらしい声が聞こえる。

「あの、スペアって持つてますか？」

「持つてきてない・・・家にはあるけど・・・」

「近くのメガネ屋さんじや・・・」

「だめなの。レンズが特殊だから、」

「ですよね・・・すごく厚いですよね・・・あ、あの、それじゃ、「
声が浅井の顔の高さまで登つてきた。浅井は女子としては長身なので、この子も割りと大きいのね、と思つた。しかしそんなことが、
声を聞かなければわからないという状況が、怖い。

見えないなんて。こんな雑踏の中でメガネを失うなんて考えたことがなかつた。

一步も歩けない。

段々本格的に恐ろしくなつてくる。

これじゃ、家にまでも帰れない・・・。

「コンタクトじゃダメですか？一時的にならそんなにしつかり合わなくても大丈夫って聞きました」

「私コンタクトしたことない・・・」

「みんな最初は初めてです！弁償しますから、使い捨てのコンタクトなら安心でしょ？」

少女は急に元気な高い声で言い、その声に腕を引かれてコンタクト屋さんに連れて行かれた。

思えば、これが全ての始まりだった。

はつきり見えない中を暖かい手に握られて人の間を縫つて、明るく小さな店舗に飛び込んだ。

「いらっしゃいませ」

その若い男の声を聞いて、浅井は初めてほんの少し恐れを抱いた。これまでがあまりに速い展開で言われるがままについて来てしまつたが、まさか新手の詐欺？コンタクト詐欺？

「ああ、初めてですか。それでは医師の診断を受けていただかないとなりませんので、一階の眼科で行つてきて処方箋をもらつてきてもらえますか？保険証はお持ちですか？」

保険証・・・保険証詐欺・・・？！

「階段が危ないですよね。ゆつくり登りますから大丈夫ですよ！」
彼女は2階の眼科まで連れて行つてくれるようだ。だけど、だけど、と思つてゐるうちに一階の眼科の扉を開けている。

「どうぞこちらに。視力測定しますね。眼底測定もしますのでね
んん・・・、本当の眼科っぽい・・・。

「近視がかなりすすんでますし乱視もありますね。コンタクトです
と、ハードとソフトと、」

「あ、あの、」

少女が口を挟んだ。

「うつかりメガネを踏んでしまつて、一時的に見えればいいんですね。
それだと使い捨ての乱視がないのでも見えるつて聞いたんですけど、
何度も使えますけど」

「ああ、1日とか2週間とかのコンタクトのことですか？確かにそ
れで不自由はしないかと思いますが、乱視に対応したものだとまた

「いえ、今日これから家に帰るまで見えればそれでいいんです！」

「んん？」Jの子、なんでそんなこと強調してるんだ？

「ええまあそれでもお密さん構わなければそれで対応できるかと思いますけどね」

そういうて、医者は伝票のよつたものに何かを書いていた。初診代と診察代で3千円。そして下の階で購入の際に使用できるクーポン千円分もらつた。

こんな商売している医者で大丈夫だらうかと思つて、うちにまた階段を下りて一階店舗に入つて、処方箋で簡単に3種類のコンタクトの箱を用意された。

色々説明されたが最後には面倒臭くなつて、一日使い捨ての一一番安いものから試して、それがそう悪くなつたのでそれに即決した。うわ！となぜか少女が声を出して喜んだ。

それで、少女が浅井の斜め後ろにいて、鏡に映つてゐることに気付いた。初めて彼女をはつきり見た。

茶色のショートヘアを柔らかく浮かせて白い肌の頬をピンクに染め、長い睫毛に縁取られた大きな瞳を開いて、キャメルのダッフルコートを着た少女が微笑んでいた。

ありえないほどの美少女だった。まるでCGだ。

浅井は初めて対面した今まで手を引いてくれていた少女のその美しい笑顔に見惚れて、呼吸を忘れた。

そしてふと、田を正面に戻した。

真つ黒い長い髪を束ねただけの、真つ黒いコートを着たキツそうな一重の瞳のやせたおばさん。

それが私だ。

「商品は「ひらのクーポン」利用といつ」と、この金額になります」

店員が商品と電卓を持ってきたので、浅井がバッグから財布を出そうとすると、少女が慌てて口出ししてきた。

「あー支払いはこっちでしますー! だってメガネ割った責任があるしー!」

あ。それで安いコンタクト選んだことを喜んでたのね。

浅井はその心遣いと無邪気さが嬉しくて、少し心が温かくなつた。
「いいわよ。あのメガネ、もう古かつたしね。あなたのおかげでコンタクトも初体験できたし」

浅井はそう言いながらクレジットカードを差し出した。

「あー! だつて、それくらいだつたら払えるのにー! それじゃビリやつてお詫びしたらいいか、・・・」

いいの。あの笑顔と困った顔とその高い声で、私本当に嬉しい時間がすごせた。こんなに可愛い子つてそうはない。それなら、
「もう大丈夫よ。見えるから。後は一人で帰れるからあなたももう気にしなくていいわ。

今日は金曜日だし早く行かないと彼氏が帰つちやうんじやないの?
もしこの子に彼氏がいるのだとしたら、きっと来るまで何時間だつて待つだらうけど。

浅井は支払い伝票にサインを記入していたので気づかなかつた。店員は見ていた。そして、固まつていた。
ボールペンを返そうとしてるのに店員が固まつてるので、やつと浅井も振り向いた。

そして、驚いた。

少女の表情が一変していた。

頬を染めて上目遣いに大きく見開いていた瞳が、今はわずかに見下ろす角度に顎を上げている。

少し開けていた口も、への字に結んでいる。

「・・・・え？・・・・」

浅井が問うと同時に返事が来た。

「僕、彼氏なんていないよ」

呼吸も瞬きも忘れた。店員は口を閉めるのも忘れていた。
やつと息を吸つて、浅井が言った。

「・・・つまり、・・・」

「つまり僕は男です。別に構わないけどね。間違えられるのは慣れてるから」

少女、ではなく少年が、浅井の声に彼せるよつと叫んだ。

まだ信じられずに、浅井はその姿を凝視する。

伏せた睫毛は恐ろしく長いのに、そしてその声はとても高いのに、間違えられる

「スカートはいてるわけでも、化粧してるわけでもないのに、間違えられる」
赤い唇で笑みを作り、彼は続けた。ただその目は笑っていない。
そうか、笑い事じゃない。私は彼を傷つけたのだ。悪気なんか
んにもなくとも、彼は傷ついたのだ。

「「、「めんなさいね、私ほら、メガネ割つたから見えなかつたし、
ね、」

「あはは。そつか。それ結局僕のせいか！」

彼の本当の笑顔になつた。まるで花が咲いたよつと店内が明るくなる。

だからといって彼を傷つけたことに変わりはない。彼が傷ついて
いることに変わりはない。

「「、「めんなさい、私本当にそそつかしくて、
申し訳なくて浅井は謝り続けていた。

それを聞きながら、笑顔の少年は目をくるつと回して、浅井に提

案した。

「じゃ、お詫びに」の後僕においらせて

何?と浅井が目を上げた。

「だつて」コンタクトだつて弁償できなかつたし、僕の立場がないよ
これじや

少年は笑顔を一瞬で崩して唇を尖らせた。そしてその顔もこの上
なく可愛らしい。

思わず浅井も微笑んでしまつた。そしてそれが了承の合図になつ
たらしい。

少年はキャメルのダブルコートのポケットに両手を突つ込み、
また花が咲くような笑顔を見せた。

「じゃ、どこに行こうか! 晩ご飯はもう食べたの?」

少年がさつそく扉を開いて外に出ようとすると、白衣の店員が
慌てて浅井にレンズの箱を入れた袋を渡した。

「本日初めての装着ですので、なるべく長時間はなさらないよう
してください」

あ、はい、と答えるとする浅井と同時に少年が言つた。

「お酒は大丈夫? お酒がいいね! どこにこいつか!」

えつ? !と浅井が少年に顔を向けると、続けて少年が言つた。

「言つておくけど、僕もう成人だからね。とつぐに二十歳なんだ。
二十歳のベテランなんだからね」

そうは見えない、という言葉を押さえつける強調。

「四月に二十歳になつたのに誰もお酒に誘つてくれないんだ。ね。
お酒の店、どこか知つてる?」

ぐるりと回つて笑顔で訊ねてきた。やはり浅井も笑顔になつてしまつ。

二十歳に見えないことを本人も知つてゐるのだ。

だからと言つて、ねえ。お酒を飲む権利はもう持つてるんだもんね。

しかしお酒の店つてまた大雑把なリクエストだわ。

そう考えて笑っていた浅井の顔が固まつたのはその直後だ。

正面から、課長が浅井に向かつて歩いてきていた。

もう灯りの消えた店舗のショウウインンドウに向かい、浅井はバサリと縛っていた髪をほどいた。

課長の姿を認めてから髪をほどくまで浅井の中ではグルグルと思考が高速回転した。

つまり、今ここでこんなに若くて可愛い男子と歩いているのはそれなりに事情があつてですね、と課長をつかまえて一から説明するか？それが弟と言おうか？いや、課長が私に弟がいないと知つている可能性はひどろか高いし、あ、じゃ、従弟！イトコつてことに！てかこんなに似てないのに信用される？というかそれを課長つかまえてわざわざ伝えるのか？

と考えた挙句に他人になりすまし気付かれないようにやり過ごすという原始的な手段に出ただけだつた。

そして幸運にも課長に気付かれずに済んだのだが、それを見ていた少年がにつこりと微笑んだ。

「それ、かつこいいね。もうオフに切り替えるつて気合入れだね！じゃあどこか知つてるお店あるんだよね？」

天使のような少年はポケットに手を突っ込んで待ちきれない風に足踏みをしている。

「早くいこー！」

「そうね」

浅井も、課長が去つた方向に背を向けて急いで歩き出した。当然のように少年も肩を並べて歩き出す。

「僕の名前は君島秋彦。二十歳、学生。あなたの名前は？」

「ああ、本当に男の子なのね、と浅井が一度少年の顔を見ると田が合つた。」

「私は、」

浅井が視線を外した。

「浅井鈴乃」

そして、ふうとため息をつく。

「一体私たちはどういう連れに見えるんだろう。親子ほど離れてはいないけど姉弟ほど近くもないし、第一こんなに見た目の共通点もないのに・・・。」

「浅井さんか」。浅井さん、お酒は強い?」

自分が見た目の心配ばかりしている間、少年は酒のことばかり考えていたようだと気付き、浅井はくすりと笑った。いや、少年じゃない。青年か。

「強いわよ」

「ああ、頼もしいね! 楽しみだなあ!」

ねえ、早く行こう! と青年・君島はスキップを始めた。

恋人も友達もいらない浅井の知っている店となると、会社の同僚に紹介された店しかない。

その中でもしゃれた小さめのバーを選んだ。

照明が天井に埋め込まれた小さな電球の数々と、ガラスケースの中に積み重ねられた様々な形のグラスを下から照らすキラキラとした間接照明と、客が座っているテーブルの上に置いたキャンドルのみの薄暗い店内。

案内された席に着き、君島は溢れる笑顔を隠さず全身で喜んでいる。

「ね! 入り口で年譜がれなかつたの初めてだ!」

「なんだ。そんなことが嬉しいのね。浅井も笑つて俯いた。

「何にする? とりあえずビールつてやつ? それでいい?」

浅井が頷くと君島が大声で、とりあえず生ビール二つ、と嬉し

そうにオーダーした。どうやらこれもやつてみたかったことらしい。じきに運ばれてきたビールグラスで乾杯し、テーブルに置かれたキャンドルで照らし、メニューを一人で覗き込んだ。

メニューにはカクテルの説明も添えてあったので、それだけではらく盛り上がった。

盛り上がったというよりは、君島が浅井を質問責めにしたというが正しい。

曰く、どれにする？これはどんな味？強い？これはどういう意味？なんでこんな名前？美味しい？塩がついてるの？何で？どうやって？

浅井は一つ一つ答えた。

答えながら、不思議な気がしていた。なぜ私はイラライラしていいのだろう？

理由はわかつていた。彼の可愛らしい顔と無邪気な性格のせいだ。この明るい笑顔だけで自分の気持ちまで晴れてくる。

そして気付いた。誰かと楽しくお酒を飲むなんて初めてだ。

先輩とはお酒を飲めなかつた。そんな年齢まで一緒にいられなかつた。

初めてお酒の楽しさを教えてもらひつのが、二十歳になつたばかりの青年にだなんて。

浅井は笑つた。少し酔つてきたようだと頬杖をついた。

そしてまた君島を笑顔で眺めて、はつとした。

「君島君、だいぶ酔つた……？」

「ぜえ～んぜん、酔つてない～！」
君島は真つ赤な顔でへラへラしていた。

しまつた……この子、ほとんどお酒の経験がないんだつたわ。

・・。ちゅつじゅじゅいかで醒まなれや・・・。

「もう出来しよ。次にい」

「なんであー！僕や、いの、アレキサンダーの妹とかいうのがさ
ヽ、」

こんな風にぐずられても浅井は笑つてしまつ。

「また今度にすればいいぢやない。今日全部飲んじやう」

「今度？本当に？」

君島がつづるな皿を向けてくる。それに浅井は笑つた。

その浅井の耳に、大声が響いてきた。

「あそ」へーあそ」の席がいいー窓際のおーつーあそ」へーしょー
大沢くーん！」

浅井の笑顔が凍つた。

栗尾の声だつた。

嘘……。なんでこんなに早く一人が抜けてくるの……？って、あ、もう一時？いつの間に……。

二人は浅井たちと同じく窓際の、空きテーブルを一つ挟んだテーブルに座った。栗尾が背を向けた椅子に、大沢が栗尾、君島を挟んで浅井と向き合う席に着いた。

気付かれる前に出ようと浅井は焦つたが、君島はまだポワ～っとしている。

「ね、君島君、」

浅井の声に被せるように、酔つた栗尾の大声が響いた。

「もうホントに嫌あ。あのイヤミなお局様あ

「いつも私ばっかりなのよお。私が一番若いからだつて分かってるけどお

・・・私のことか？

「さつきのだつて、ど～考えたつてお客が悪いに決まつてんのにい

・・・私だ・・・

「自分で余計なことしてさあ、仕事ができるうみたいなフリすん

のぉー！」

・・・ん～・・・

「浅井さんは実際仕事できるよ。それはみんな認めてんじゃね～の？」

「ああ、余計なフォローしないで。大沢君・・・

「あ～！！！大沢君、庇うんだあ～！あのオバサン！」

オバサン・・・

「趣味わる～つ～～～あのヒト絶対力レシいな～歴年齢と一緒にだよ

！キモつ！」

キモ・・・・

浅井は俯いて頬杖をつき、ため息をついた。
その浅井を君島が半眼でじっと見ている。

「髪型一回も変えたことないって、ありえなくない？ずっとあの真
っ黒のロングだよ？」

「先輩が好きだつて言つたの。絶対変えないわ」

浅井が小さく反論した

「メガネだつてさあ！あれ一つしかないのよ～貧乏なの？ケチ？て
か面倒なのよ！もう女じやない！」

「同じのを三つ持つてるわ。先輩が選んだフレームなのよ。他は選
ばないわ」

浅井も酔つているのだ。こんなことを口にするのも初めてだ。
「でも可哀想よね。女に見られないままオバサンになつてしまつた

なんて、ホント、可哀想！」

きやはははは、と栗尾が大声で笑つた。

浅井は、俯いたまま微笑んだ。

「お前さ、いいすきだつての。そんなこと思つてんのお前一人だよ」

「いいわよ大沢君。あなたがフォローするたびにもうとひどくなるの。そういうものよ。」

「もういい。私も、何バカな」と言つてゐるんだか・・・。」

「君島君、もう、」

浅井は無理に笑みを作つて、顔をあげて君島にまた言つた。それを待つてたかのように、君島が尋ねた。

「浅井さん、フェアレディZつて、知つてる?」

思いがけない突然の質問だったので、浅井は反射的に頷いた。
君島は真つ赤なままの笑顔で浅井を見つめ、続けた。

「ラジオで聞いた話なんだけどね、D-1がど田舎のど田舎の同会に行つたんだって」

そう言って、彼はテーブルに目を落とした。
「自慢のZで行つたんだよ。赤いZ」

グラスから落ちた水滴を指で、テーブルに「Z」となぞった。
浅井はその君島の長い睫毛に目を奪われた。

「それでね、会場の公民館に時間より早く着いちゃってね、
私は、こんなに可愛くなかったな。浅井は、ふと笑った。

「Zをさ、適当な場所に停めて会場の下見してたの
可愛いなんて先輩が言つてくれただけだつたな。

それで充分だつた。

他に何もいらなかつた。

ずいぶん私は幸福だつた。

ふと、君島の声が止まつていてることに気付き顔を上げると、それ
を待つっていたかのように君島が笑みを見せた。

「でね、そのZが停めてあつた場所が超ジャマな場所でね、運転手
を館内放送で呼び出すことにしたの」

君島がまっすぐ浅井を見詰めたまま語るので、浅井も目をそらせ
ずに頷いて聞いた。

「だけじゃの公民館にいたのがおじいちゃんばかりで、車見にいつたのもおじいちゃんで、放送したのもおじいちゃん」
浅井がまた頷いた。

「えへ、お呼び出しあります、玄関前に停めてある、赤いへ、ふえあれでーこという車でお越しの方」

滴で書かれた「ニ」の最後を人差し指でピンとはねあげた。

浅井が、ふふつ！と吹き出した。

「うつ、嘘！ そんなのつ・・・！」

そう言つてから、あはははと大声で笑つてしまつた。

「あー嘘じやないよ！」

真剣に反論する君島も可笑しくてさらに笑つた。

「ホントだよ！ だつて、外見てみてよー！」

「なによ外つて」

笑いながら、浅井は外の様子を見よつと顔を窓に近づけた。

「真つ暗で見えないわよ」

「見えてるよ」

「何が？」

「窓に映つてる。きれいな女人」

「そんな、」

そして浅井にも見えた、窓に映る頬を染めて笑う長髪の女性。

「きれいでしょ。髪縛ってたときもね、きれいだと思つたんだよ」
その言葉にすぐには反應できなかつた。自分のこんな笑顔を見る
のは初めてだつたから。

「髪を下ろすとまるでウーラブなんだよね。それもよく似合つよ」

困る……。いつもこの慣れてない……。浅井は髪をかきあげ
て、困つていた。

「あなたは、きれいだよ」

浅井は、笑つことにした。

「そんなこと言つたつて何にも、」
そう言つて君島の方を向いた。
直後に君島が叫んだ。

「だめー！」

だめ、と叫んだ君島がぼやけていた。

なにか白いものが眼前に迫ってくる。

「『めん！僕、あなたが、』

君島の温かい手が頬に触れたようだ。
まさか

「あなたがこんなに傷ついてると思わなかつた・・・！」

まさか私、

泣いてる？

浅井は驚いて自分の頬に触れてみようとして、君島にその手を握られた。

「触らないで、コンタクトは僕が取るから

「どうか、涙でコンタクトが取れたのか。

「どうか、泣いてるのか。

「どう認めたら、次々と涙が湧いてきた。

「なんだろうこの涙は。

「ああ、『めんね、このコンタクトもう使えないんだよね、

君島がおろおろしながらそんなまぬけなことを言つ。

可笑しくて、笑つた。それでも涙は止まらない。

「なんだろうこの涙。

「僕、ハンカチもティッシュも持つてないよ。このペーパーナプキンでいい?」

君島がそれを浅井の頬に当て、涙を吸い取つた。
またわざわざに触れた指が温かい。

「その、温かい手が、嬉しい。
温かい視線が嬉しい。

涙の理由なんてわかつていた。

私は寂しかったのだ。こんなにも。

「「めんね～、浅井さん、今度また飲みに行く話、ナシにしないでね！」

浅井はまた声を上げて笑つてしまつた。泣きながら。

こんな涙は初めてだ。

浅井は目を押さえて、涙を收めようとした。

笑つて「まかす方法はないだうつかと考えながらも、涙は止まらない。

今は嬉しいのに、笑つてゐるのに、どうして止まらないんだうつ。
そしてその涙も、ずいぶん気持ちがいいのだ。

君島を困らせて「」とも、気持ちがいいのだ。

こんな涙は初めて。

ありがとう。君島君。

浅井は笑いながら、泣きながら、そんなことを考えていた。

その時、聞き覚えのある声が浅井を呼んだ。

「あの、・・・浅井さん、ですよね？どうしたんですか？」

大沢が一人のテーブルの横に立っていた。

浅井の甘い涙は一瞬で引っこんだ。

「なんで泣いてるんですか？」

大沢が心配そうに訊いてきた。

え~~~~~！ うるさい！ うるさい！ うるさい！ うるさい！

Digitized by srujanika@gmail.com

やだ~~~~！そんなことで泣かないし~~~~！バカにするな

「すいません、俺、」

「勝手によそのティー・フルに来るなよ」
酔っ払った君島の声がした。それを無視して大沢が続けた。
「栗尾、悪酔いしてるんで、気にしないでいいっていうか、」
「こっちのことに口を挟むなって言つてんだよ！」

君島が怒鳴つた。

「だいたい何だよーあんなこと言わせつぱなしにしておいてーてか
全然浅井さんに当てはまらないしー。」

浅井は驚いて顔を上げた。そして大沢は君島を見下ろして、諫め

た

「君、女の子でしょ。ちよつと言葉が乱暴じゃなーいの?」

「なんだと！」と君島が椅子を倒して大沢に向かおうとした。
「言つちやつたあ・・・と浅井がため息をついて立ち上がり、教えた。

「失礼よ、大沢君。男の子なんだから」

大沢が沈黙しているうちに、君島も立っていることだしこのタイミングでましょ、と浅井がバッグを持ち上げた。

一 帰ろ、君島君

- 3 -

浅井には周囲がよく見えないので、君島が浅井の手を掴み先導しようとした。

「あつ・・浅井さん！」

大沢が浅井の空いている方の手を掴んだ。

「……男ってなんすか！誰ですか」いつ！

でただけだ！」

間髪入れずに君島が答える。

「なんですか！今日だって断つておいて、」

「あ、君、断られたんだ？じゃ振られたんだろ！気付けよー。」

「じゃあ一人で誘わないお前が悪いんだよ！」

君島が浅井の腕を握る大沢の手を払った。

「行こう！ 浅井さん！」

君島が浅井の腕を掴み、早足で立ち去りうとした。

浅井は一度大沢を振り向き、やっぱり見えない、と笑った。

大沢は一人立ち尽くしていた。

自分の腕を払った君島の力が思ったより強かつたことと、浅井が

最後に向けた笑顔で動けなくなつた。

そんな顔するんですか、浅井さん・・・。

「君島君、本当は酔つてるでしょ」

「酔つてないよー。やつものせた、あいつがシッレイだつたでしょ？」

「うん、まあ確かに・・・」

「ね！それにさ、僕さつき浅井さんの真似したんだよ。気付いた？」

「え？ 何？」

「浅井さんでわ、説明の真ん中抜かすの。最初と最後だけ言つたの。知つてた？」

「そんなことない。普通よ」

「ふふふ。ホントだよ。だから相手がついてこれないの」

その後離れた場所から、浅井さん！と大沢の大声が聞こえた。

「ほらね！ 今気付いたんだよ僕が言つた」との意味に！

「え？ 何を言つたの？」

「あいつに聞けばいい」

「浅井さん！」

大沢が追いついて、浅井をまっすぐ見て呼んだ。しかし浅井がふと気付いた。

「大沢君、あなた栗尾さんに責任あるわよね？」

「責任？！」

あははは、と君島が笑つた。

「それだよ、浅井さん。間の説明を飛ばして。ふふ。僕会計してくるね」

君島が離れた。

「栗尾は、その、悪酔いしてるんでこれから自宅まで送つていきますけど、浅井さん、明日、ヒマですか？」

「…………え？」

「そんな、今日あつたばかりのヤツと飲めるなら、俺とでも飲めるでしょ？」

「は？」

「いつも、断るから、きっと俺が誘つても断るんだと思つてた」「え？」

「明日、デートしよ？」「う」

「…………ええ？」

「いいよね？」

浅井は急に不安になつた。何しろはつきりとは見えてないのだ。つい振り向いてキャメル色を探した。

すると後ろからキャメルが近づきながら、浅井を通り越して大沢に言つていた。

「今さら？ていうか、失礼の上乗せだよね。浅井さんがメガネ外して髪下ろさなきゃキレイだつて気付かなかつたんだろ？」

「知つてたよ。お前よりずっと前から知つてたよ」

「ウソつけ。じゃあ、いつからだよ？」

「俺が入社した時から。だから3年前から」

「なにそれ？3年も片思つて？バカ？今どき小学生でもやらないよそんなの」

大沢が黙つた。

「言えなかつた。浅井さん、頭いいし、俺高校中退だし、誰が見たつて釣り合わないつて」

「なんだそれ？」

被せるように反論したのは、浅井だった。

「知らないわよ高校中退だなんて。何よ釣り合いつて。そんなことで」

さつきまで自分が君島に釣り合わないことに不安だつたせいで余計腹が立つていて。

「だいたい何？頭いいつて。私は普通に仕事してそれで生計立てるだけのことよ」

そして酔つていいで、思考がズれていく。

「だけどそれじゃダメなんじょ～さつき言つてたのはそつこいつ」となんじょ？」

「いや、俺は何にも、」

「ファッショソやアクセサリーにお金かけないのはまともじやないつて言つなら、まともじやなくてもいいわよ」

「あの」

「私は一人で困らないようにずっと頑張つてやつてきたこれからもやつていくの。だから全然困らないの」

ふふ、と隣で君島が笑つた。

「これまでだつてずっと一人でやつてきたんだし、これからだつてずっと一人で、」

君島の指がまた頬をなでたので言葉が途切れた。

その動作で、浅井はまた自分が泣いていることに気が付いた。

嘘。

今度は何の涙だつていつの。

浅井は自分で自分がわからなくなつてしまつた。

「だけどこいつは、浅井さんを見てたんだってわ」

君島が浅井の右手を取つた。

「で、今も見てるだけかよ」

そしてその手を、大沢に渡した。

「今まで苦しかつたのも全部こいつのせいだから、目一杯嫌がらせしてやつたらいいよ」

輪郭のぼやけたキャメルが浅井から離れていくのが分かつた。

「え？ 君島くん、どこ行くの？」

浅井は慌てて言う。

「僕はさ、キューピッドだつたね

コンタクトショップで見た君島の姿が思い浮かんだ。
キャメルのダッフルコートをふわりとゅらして笑う、まるで冬の天使のよつな。

「そいつに送つてもらつて。3年も待たせたんだからタクシー代くらいだしてくれるよ」

君島の足音がする。

「だつて、また飲みに行こいつで、」

その天使が消えてしまつ氣がして、追いかけよつとした。

「うん。また行こう」

大沢に腕をつかまれていて進めない。

「また会えるよ。きっとね」

輪郭のぼやけたキャメルの天使はそつ言つて、ドアを開けて消えた。

一度止まつていたのに、浅井の涙がまた溢れた。

会つたばかりの天使のよつな可愛い男の子。

その姿だけでその視線だけで、そしてその言葉で自分がどんなに

救われたか、

わずか数時間がどんなに貴重だったか、浅井は自分の胸の痛みで

知った。

今までこんな気持ちで泣いたことはなかつた。

今度は大沢が浅井の頬の涙を拭う。

「あの子にもう、会えないのかなあ・・・」

泣きながら浅井が呟く。

「俺がいてもダメですか？」

大沢が言った。

泣き顔で大沢を見上げる。

すると大沢は、浅井の頭を撫でた。

「すいません・・・浅井さん、可愛いですね。泣いてるから、子供みたいだ」

それが優しい笑い声で、頭に置かれているのが大きな手で、浅井も自分が子供のように思えた。

「会えると思いますよ。俺は会いたくないけど

泣いてるのに笑えてきて、浅井は下を向いた。そうね。きっとまた会える。

大沢くんのことはよく知らない。これからいろいろ訊いてみよう。多分この大きな手は私を傷つけない。キヤメルの天使が認めたのならそうだろ。う。

私にはそれが重要だ。あの子がキューピッドなら、とりあえず従うわ。

違つてたら、・・・そうだ。どんな手使つても探し出して、文句の一つも言ってやる。

「20歳・学生・君島秋彦」

多分これで探せる。きっと。そう考えて、浅井は安心した。

そして気付いた。

「私・・・コンタクト取れちゃって、今何も見えないのよ。・・・
どうやつて帰るう・・・?」

大沢と浅井が酔いつぶれた栗尾の腕を両側から支えてタクシーに乗り込み、自宅まで送り届けてから浅井のアパートに向かった。思いがけず訪れた幸運に大沢はすっかり浮かれていたのだが、「あれ？ 大沢君ってこの前まで南営業所の三島さんとつきあつてたわよね？」

という浅井の突つ込みにうろたえた。

入社当初から浅井に憧れていたのは本当だった。

しかし当時20歳だった大沢にとつて5年の年齢差はただでさえ大きく、そして浅井とはそれ以上の差を感じていた。

壁がある、というか、バリヤーを張っている。浅井にはそういうイメージがあった。

なんとか、どこかからそのバリヤーを破つて、または破れ目から忍び込んで、という気持ちで今日も会社で声を掛けてみた。それも結局空振りだったのだが。

その気持ちと、休日や空いてる時間を特定の女性と一緒に過ごすことは、大沢にとつては別だった。

「あ、あの、三島とは付き合ってないっていうか、俺断つたんですけど、向こうはそう取らなかつたっていうか、いや、やっぱり付き合つていなかつたです。今はあいつちゃんと男いますし、俺は、」そこで大沢は絶句した。続ける言葉が見つからない。

大沢にとつてこれまで恋愛とはここまで緊張を伴うものではなかつた。

自分から告白したことは一度もない。しかし相手に不自由したことも一度もない。

つまり自分から行動したのは今回が初めてで、さつきの小僧の言う通りに小学生のように緊張している。

「そういう意味では、俺は今までちゃんと付き合つたことなんかないんです」

俯いて額を搔きながら、小さな声で言った。

え?と浅井が訊き返したが、大沢は答えず、代わりに質問を返した。

「浅井さんは前に付き合つた人はいるんですか?」

浅井はすっと視線を外して目を伏せ、すぐにまた大沢の目に視線を戻し、瞬きもせずに答えた。

「内緒」

大沢の目を射るように見つめたあとに、また浅井は目を伏せた。

内緒。

いない、とクールに即答すると思っていたので、大沢はその反応に戸惑つた。

イエスかノーで答えられる質問に対する答えが、内緒。

そんな曖昧な答えを言つた浅井の目には、なにか強い意志が見える。

助手席のシートを見ているよつて見ていない瞳の奥に見えるのは何だろう。

多分、決意。

決意・・・?

一步踏み込んだバリヤーの内部に、まだ何重もバリヤーが囲っている。

結局大沢のイメージをそんなふうに上書きして、浅井がタクシーを降りて行った。

タクシーを降りて大沢に手を振り、浅井は階段を上がつてドアの鍵を開けて灯りをつけた。

メガネもコンタクトもないのぼんやりとしているが、今朝出てきたままのシンプルな2DK。

長年住んでいるので、何歩でドレッサー代わりの棚に辿り着くか知っている。

そこから引き出しを開けて、予備のメガネを取り出した。

これも先輩が選んだあのフレームと同じもの。

先輩を失ったのは10年前。

実家と縁を切り、大学もやめて、先輩と過ごした街で仕事をみつけて、ただ生きてきた。

それで精一杯だったし、死ぬまでそれが精一杯だろうと思つていた。

それなのに天使に出会い、自分を見ていた目を教えられ、そしてそれに心を動かされた。

それを嬉しいと思うことを、先輩に対する裏切りだとは浅井は思わなかつた。

毎日健康に生きていることが既に裏切りだと、10年間思い続け

てきているか、

翌朝早く、大沢が浅井の部屋の前に立つた。
チャイムを鳴らし、ドアが開けられ、

現れた浅井を見て大沢は用意していた挨拶を飲み込んだ。
浅井は昨夜のようにメガネを外して、長い黒髪をほどいて流して
いる。

黒のショートコートが白い肌を強調し、細身の長身はモデルのよ
うだ。

見惚れてほんやりしている大沢に、浅井が首を傾げながら行き先
を尋ねると

「どこでもいいですよ」

と最も困る答えを返された。しかしそれは予測範囲内。

「朝だし、モーニング食べながら考えよつか
はい！」と大沢が喜んだ。

大柄な大沢の車は紺のRV。

ただでさえ車に乗ることがめったにない浅井にとつて、こんな背
の高い車は見たことはある程度の認識しかない。

乗つて、と言いながら軽く運転席に乗り込んだ大沢の動作を見て、
あ、ドアを開けてあそこを掴んで、と学習したものの、ステップに
乗せる足を間違えて考え込んだりした。

大沢がそれをじつと笑いを堪えてみてるので、浅井はちょっと
睨んだ。

「怒んないでください」

とやはり大沢が笑つた。

「どの方面に向かいます？」

「街にしようつか？とりあえず街中の駐車場に停められたら後が楽よね？」

「はい。じゃ、栄方面に？」

「はい」

そして車は出発した。

車を運転しないので、浅井は車道の真ん中を走っているのが怖い。
「免許あるんですか？」

「あるけど、ペーパー」

「車乗る気はないんですか？」

「う～ん。車買つて持つお金もなかつたし、車なくても困らないし。
・・・

「そんなもんすかねえ。じゃあ、困つたら俺に言つてくれれば、買い物ぐらい付き合います」

車道が怖いのできつと窓から外を見ていた浅井は、ちらりと大沢を見上げた。

気付いた大沢が顔を向けたので、ありがと、と笑つた。
すると大沢が照れて頷いた。

多少朝が早くても、モーニング文化の発達した地域なので喫茶店は山のようにある。

いつも満車の街中の駐車場が空いていたので、そこに停めて二人でうろうろと探した。

「ここ」の3階の店、満腹モーニングつて書いてます」

「満腹？そんなに食べる？」

「俺は食べますけど。浅井さんは？」

「私、朝無理。でも大沢君食べるなら私も上げるし」

「え・・・。それじゃ満腹モーニングじゃ多過ぎるかな」

そしてその上の階の、自然派モーニングの店のドアを開けた。

メニューを見て、自然派じゃ足りなかつたかなあと大沢が呟いた

ので、また後で別のところで食べたらいいじゃない、お昼に混む前の方が多いし、と浅井が笑つた。

大沢もまた笑つて頷き、じゃ次の店探しましょうとタウン誌を持ってきた。

そのタウン誌の新譜紹介ページで大沢が手を止め、このCD欲しい、と呟き、え？それ？私それじゃなくて、今度出るケミカルが欲しいの、と浅井が言った。

趣味近いみたいですね。じゃ、このあとこの屋に行つてみます？と、予定が決まった。

昼間でもクリスマスマードの街は煌びやかで、店の大きなウインドウの前に鮮やかなポインセチアが並べられ、白いシクラメンもそれに沿い、濃い緑がそれを縁取る。

歩く人々も楽しげで、隣を歩く大沢も楽しげで、クリスマスマジックなのかなあと浅井は分析している。分析中に気付いたが、通り過ぎる女子がほとんど大沢に振り向く。派手なブルゾンにゅつたり目のブルージーンズ、長身小顔で短い茶髪。

ぱつと見て目立つ上に、じつくり顔を覗き込んで黒目がちの整った童顔。

そうだった。大沢君は、事務所人気筆頭イケメンだった。その筆頭イケメンは、楽しげに延々と浅井に話しかけている。

浅井さん、歩くの速いっすよね。

いつもCDで買うんですか？

てか、トランス以外は何聴くんですか？

浅井も考え方をしながらも、質問には次々と答えて、ビル8階にあるCDショップを目指した。

その二人を、会社の同僚事務員一人が見ていた。

やはり目立つ大沢に気付いて、声を掛けようと走り寄つてから女連れに気付き、

あら、やだ、大沢くんつてフリーだつたはずなのにどうして？誰あれ？

とその後をつけた。

身長はお似合いのサイズだけど、モデルみたいなスタイルだけど、かなりのロングヘアだけど真っ黒よね、きっとそのせいで顔も白く見えるし小さく見えるけど、でもほら全体的に地味な感じね。

と小姑のように判定した連れの女が浅井だと氣付いたのは、昼前に喫茶店に入つてからだ。

テーブル一つ離れた場所を選び、二人の会話に聞き耳を立てていた時に、大沢が大きな声で相手の名前を呼んだのだ。

「え！ 浅井さん、ダフトパンク持つてんの？！」

事務員は、グラスを持つ手を離してしまった。ゴンと鳴つてジュースが少し零れた。

もう一人の事務員は、俯いて固まつた。しばらく無言のまま固まつた後、一人はゆっくり田端のテーブルの方を覗き見た。

そう言わればあの長身はまさにお局サイズ。

あれにメガネをかけて髪を縛れば、・・・・・

そうなの？ 今ちょっと想像できないんだけど、そうなのね？ きっと？

でもたつたそれだけで、メガネと髪だけで、人つてそんなに変わるもの？

事務員はその衝撃を受け入れるだけで疲労困憊し、食事を終えて出て行つた二人をさらに追う気力を失つていた。

ただ、目ではそれを追つっていた。

大沢が会計をして、浅井がそれを先に店外に出て待つていて。正にカツプルですね。デート中のカツプルですよね。

長い黒髪が風になびいて、細い指でそれを押さえている。ただそれだけの仕草が、モデル体型のせいか美しく決まって見える。

事務員たちは、それを目の当たりにするだけで脱力していた。

そのモデルのような浅井の元に、天使のような少年が駆け寄つて

その腕を引いたのを見ても、

ああ、似合つたじゃない？

と、頷いた。

驚くのに疲れたのだ。

「やーまた会えたね！」

白いダウンジャケットを着た君島が浅井の腕を取った。

「へ？君島君？！」

「秋ちゃんつて呼んで」

突然の出来事で、浅井はあっけにとられている。

大沢が出てくるのを待ちながら、周囲をぐるりと眺めていて、ダイナミックなランニングフォームで逃走している白い人がいるな、とは思っていた。

それが予想以上の速度で、浅井の腕を掴む直前までそれが君島だとはわからなかつた。

「え？君、・・・秋ちゃん？」

「うん！待つた？」

「へ？」

そして、君島を追つてきた中年の男女が息を切らして、声が届く距離まで追いついた。

「まで！小僧！」

君島がくるりと半回転して、浅井の陰に隠れた。

へ？とまた浅井が君島を見た。

「あんた、この、小僧の、なんだ？」

中年の男が浅井に訊いてきた。

話しかけられたことに驚いたが、それ以上にその口のきき方が不快だったので答えなかつた。

「あんた一体、この小僧と、どういう関係なんですか！」

激しい息遣いの合間に怒鳴られる。

君島が苦笑して、浅井の前に出て男と応対しようとしながら、浅井がそれを右手で断つて、言つた。

「あなたに答える義務はないでしょ」

男が、なにを！とまた怒鳴りかけたが、女が男の袖を引いた。「みつともないことやめてよ！普通のカップルじゃないの！何考えてんのあんたは！」

私買い物に来ただけだって言つてるでしょ…

「ふざけんなよ！この小僧前にも見たぞ！」

「私はないわよ。じめんなさいね、お兄さん」

「いえ。いい運動になりました」

君島がにこりと答えた。

なにを！とまた一步踏み出そうとした男を、浅井が睨んだ。

「邪魔しないで下さい」

君島を睨み続ける男を、女が引つ張つて行つた。

はあ～、と君島が、荷物を降ろしたよつに肩を落とし、ため息をついた。

「何？今の」

「聞かない方がいいよ」

浅井の簡単な問いに笑つて君島が即答した。

「そういえば昨日の彼氏は？もしかして今デート中？」

顔をしかめたまま浅井が頷くと、え、本当？僕がいぢや まずいね、と立ち去ろうとした。

「ちょっと待つて。携帯ぐらい教えてよ」

君島がまた苦笑して、電話を取り出し、簡単に番号交換をして、じや、と右手を上げて走り去つた。

「携帯なんか出して、どうしたの？」

直後に大沢が店を出てきた。

「うん。イタ電。こちそつさまでした」

「あ、はい。いえ。イタ電つて多いんですか？」

「ううん。 それでもないよ。 大丈夫。 あの、 大沢君つて、 赤が好きなの？」

「は？」

「ブルゾン、派手な赤だし。結構赤系が多いよね？」

「ああ、そうかな。はつきりした色だから」

「黒は？」

「浅井さん黒多いっすよね」

「無難な感じだし」

よし、じまかした。と浅井は頷いた。

帰りの車の中で浅井はクリスマスの予定を訊かれた。

訊かれるまでもなくこれまでクリスマスにイベントがあったことがないので、首を振った。

「じゃ、空けといてください」

大沢に真っ直ぐ見つめられて反射的に頷くと、大沢も満足気に頷いた。そして俯いたまま続けた。

「俺、本当に、本気です」

運転する大沢をじっと眺めた。
きれいな横顔だ。

どうしてこの子が私を・・・?

入社した時からって言つてたけれど・・・。

今でも若いけど入社した時は20歳。

その頃からもちろんこのきれいな顔だったのだけれど、
その頃から私を見ていたというのは一体どうしたことだらう?

「大沢君、私、あなたが入社した時つて何かしたっけ?」「は?」

「だつて、うちの事務員つてたくさんいるし、私つて目立たない方
だと思つんだけど」

「あ、俺が、その、昨日の話ですか?」

「うん。あれ?でたらめだつた?」

「いや、まさか。てか、やっぱ浅井さん覚えてないんすか
「え?」

「俺入社して一発目で搬入ミスやつたんですよ。そのフォローを
浅井さんにしてもらつた」

「んん?だつて、それが私の仕事だし」

「そう。あの時もそう言った。俺が社長に怒られて謝りに言った時」

「だつてそうだもの」

「いや、それどころかフォローしたことも忘れてたんだよ」

「え」

「お礼言つてんのに、何のこと?とか言つて」

「あ、ごめん。忘れっぽいから」

「そう、それもあの時聞いた」

「それで?」

「それだけ」

「え? それだけ? ミスのフォローしただけ?」

浅井が疑わしげに大沢を見上げた。

「そうです」

ごめん、新人君の仕事なのにね。忘れてた。

浅井はそう言つて笑つた。

その笑顔が美しかつた。

大沢が見た浅井の初めての表情は、笑顔だったのだ。

あれ以来ほとんど見ることはなかつた表情を、大沢はずつと忘れなかつた。

そして、それ以上の表情を昨夜見せられた。

それは結構ショックだつたが、その勢いで今日があるので、今

日一日ずいぶん楽しかつた。

クリスマスの予約もとれた。

少しづつ、これからだ。

夕方に部屋まで送つてもらい、手を振つて別れた。

一人暮らしで週末は家事もたまつてるので夕食までは一緒に

しなかつた。

翌日日曜日も洗濯をしたり布団を干したり、一田家事に追われる予定。

大沢と街を歩いて一緒に過ごすのは、悪くなかった。

会話も楽しいし疲れなかつた。

やはり、私を好きだと言うのが今一よくわからないけど、まあそういうこともあるのかなあ。

急に始まつたことなので浅井自身まだよく自分の気持ちもつかめていない。

多分、これから少しづつなんだろうな。

浅井もそう考えていた。

「何それ？嘘でしょ？本当に大沢君だつた？」

「大沢君は絶対大沢君だつたんだけど、」

「なによ、浅井さんじやなかつたの？」

「それが・・・浅井さんだつたのよ。だつたんだけど、」

「何なのよ！はつきり言いなさいよ！」

月曜日の事務所でのトップニュース。

一番大きな声を上げたのが栗尾だつた。

それはそうだろう。金曜日の夜は栗尾が大沢を独占していたのだ。それがその翌日には浅井に盗られたとなると、よく考えればみつともないことだ。

しかも栗尾には金曜の夜の後半の記憶がないので何があつたか皆田見当がつかない。

「だつて、メガネ外して髪も下ろしてたから全然印象が違つてて、でもよくよく見るとやっぱり浅井さんだつたのよ」

「そんなんに変わるかなあ？」

「それから、それだけじゃなくて、すつ・・・とい可愛い男の子に抱きつかれてた」

「え！」

「女の子みたいな男の子で、もうすつ・・・とい可愛い子で、なんかもう浅井さんもやせててスタイルいいからすつ・・・といお似合いで、とにかく大沢君ともお似合いで、あたしもう疲れちゃつて・・・」

「何言つてんの？」

「本当なのよ。私も疲れちゃつたの。見ればわかるわよ

「ね～。疲れたよね～」

昨日一人を見た事務員一人が顔を合わせて頷いた。

嫌だわ、と栗尾は自分の机に戻り、ネイルのデコを撫でる。クリスマスまでに大沢と付き合おうと思っているのに邪魔が入った。

でもまだ時間はあるから大丈夫。
これまで一人でクリスマスを過ごしたことはないの。
だから今年も大丈夫。

栗尾には自信があった。

噂がすっかり膨らみきつた水曜日、大沢が昼に本社事務所に顔を出した。

まだバレていないと思っている浅井は大沢に目もくれなかつたのだが、事務所内の全員が一人に注目していた。

そして栗尾は何も知らない素振りでいつも以上に馴れ馴れしく大沢に話しかけた。

「大沢君、お昼どうする？ またあそこに行こうか？」

精一杯浅井に挑戦的なセリフを言つたつもりだが、浅井は反応しない。

いや、弁当買つて帰るよ、と大沢が答えると、じゃ一緒にコンビ二行こうね！ と高い声を出した。

しかし浅井もコンビ二に行くので一緒になる。

普通に財布を持つて、他の事務員たちも一緒にエレベータに乗り込んだ。

ビルの前の幹線道路は中々信号が変わらない。

大沢にへばりつく栗尾から離れた場所で浅井は信号が変わることを待っていた。

やつと大通り側の歩道の信号が点滅を始めた。

そしてその時、急ブレーキの音と「ギャン」という金属音に似た音が重なつて聞こえた。

急停止しかけた車は再び速度を上げて交差点を通り過ぎた。

しかし歩道にいた全員は、その車が急停止しようとした場所に反射的に目を向けた。

後続車が、小さな塊を避けたり避けきれずにタイヤで踏んだ。

「ネコ?...」

「嘘!」

「やだあ...」

信号が黄色になり、避けもせずにアクセルを踏む車も通り過ぎる。栗尾が悲鳴を上げて大沢に抱きついていた。

大沢は焦つて体を離そうとしていたが、浅井は気付きもしなかつた。

ほんの田の前で起つてこりの惨劇を、自分は見ていいことしかできない。

何かできることがないのか考えてもまるで思いつかず、かといって目を伏せることもできない。

せめて早く車が停まって欲しい。でも停まつたところで、自分に何ができる。

どうしたらいいのかわからない。多分何もできない。

浅井はそんな無力感と絶望感に苛まれていた。

車が速度を増す中、大きなライムグリーンのバイクだけが車間を広げ、ライダーが上体を起こしてヘルメットのシールドを上げた。そして後ろを振り返り左手を横に伸ばして手の平を向け、後続車に速度を落とすように合図した。停止線まではまだ距離がある。

後続車はクラクションを鳴らして抗議したが、バイクは構わず停止し、左足でスタンダードを出してから両足を下ろした。

グローブを脱ぎ、タンクバッグを開けて中からレジ袋やタオル、ティッシュを取り出し、ヘルメットを被つたままバイクから離れ、

かつてネコだつた肉の塊の前に膝をついた。

後続車はクラクションを鳴らすのを止めた。

ネコにタオルを被せ、そのまま拭うように拾い上げてレジ袋に入れた。

自分の手もティッシュで拭き、それも一緒に別の袋に入れてきつ

く縛り、立ち上がってバイクに戻る。

相当長身の男だった。

ネコの入った袋をタンクバックに入れて後続車に頭を下げてからバイクに跨りグローブを嵌め、何事もなかつたように走り去つた。

信号は再び青になつていた。

「す」・・・・・

「あざやか・・・・・」

結局全員、信号で渡らずに一部始終を見ていた。
浅井も口を開けてみていた。そして、小さく、す」、「と呟いていた。

大沢がそれに気付いていた。

「今つて、ジガーレイのバーテンじゃない?」

「え?あのオカマ?」

「違うつて!あんなオヤジじゃなくて、学生のバイト君がいるじゃん?」

「ああ!あの超でつかい?」

「やうね、今の子超でつかかっただしね」

「ジガーレイ?」

浅井が思わず訊ねると、若い同僚が勢い込んで教えてくれた。

「そうです!ちっちゃいカクテルバーなんんですけど、店長がオカマっぽいんですけど、ほかのバーテンが結構イケメンで、さつきのバーカイクの子も多分そなんですよ!おまけにあの子つて、名大生なんですつて!」

「へへ・・・・詳しいのね」

「やだ!私じゃなくて番子があそ!ぱっかり通りてるから、付き合いでですよ~」

「あ、なによ、紗絵があのバーテン狙いなんでしょう!」

「違うわよ!どうせカクテル飲むならイケメン見ながらつて思つてるだけよ!」

「嘘!あんたつてあのバーテンにばっかりオーダーするじゃない!」

「あの子のショイクが一番上手なの…」

「何やらしい」と言つてんの！」

「え〜！意味わかんないんだけど…」

思わず吹きだしたが、信号が変わったので浅井は横断歩道に足を踏み出した。

その時に後ろから大沢の声が聞こえた。

「戻るわ」

浅井が振り向くと、大沢は踵を返してビルに向かっていて、どうしたのよ〜!と栗尾が呼びかけていた。

どうしたのかな、と思いつつ、浅井はそのままコンビニに向かった。

会社帰りに浅井は、赤の毛糸と編み物の本を買った。クリスマスマではそう時間がないので、マフラーへりにしか編めないだろうと思つ。

昔から編み物は好きなので、当分これに掛かりきりだと思つだけで嬉しかつた。

そして一人で街を歩きながら、君島のことを思い出していた。携帯の番号を記録した日に、帰つてからすぐに電話したのだ。しかし取つてもらえなかつた。次の日も。その次の日も。そして今日もこれから掛けようと思つてゐる。どうか、掛けなおしてよ、と思つてゐる。

そう思つていたその時、携帯が鳴つた。

歩きながらしゃべるのが苦手なので、歩道の隅に寄つて立ち止まり通話ボタンを押して耳に当てた。

すると後ろから、「もしもし」と聞こえた。

笑つて振り返ると、予想通り君島が右手を上げて立つていた。

「何度も電話したのよー。」

「うん。知つてゐる。何度も電話もつたよ。」

今日も白いダウンジャケット。相変わらず天使のよつと輝く笑顔だ。

「なんだかよく会つわよね。もしかしたら今までもよくすれ違つてたのかしら?」

「それないよ。」

君島が浅井の腕をとり、歩き出した。

「だつて最初に会つたのがこのあたりだつたから、ここで待つてた

らあなたに会えるってわかつてたし」

浅井がちらりと君島を見た。

「あら。待ち伏せしてた?」

「ふふ、と君島が笑つた。

「してない。たまたま通りかかったら、あなたがたまたま歩いてたら電話したの」

「そう。じゃあ私たちは相性がいいのかもね」

「そうだね。結構運命的な出会いかも知れないね」

笑いながらふざけた会話を続けていたが、それをまたしても同僚事務員が聞き耳を立てていた。

それに気付かず、二人は近くの喫茶店のドアを開けた。

「それで、この前のはどういって？」

「この後予定があつて食事をするほど時間がないといつ君島に、まず一番訊きたいことを切り出した。

「あの追いかけてきたおじさんは？」

君島はコーヒー カップに口をつけたまま、浅井を見上げた。可愛い顔してブラックなのか、と浅井は首を傾げてショガーポットを開けた。

「教えないよ。内緒」

カップを置いて君島が答えた。

「内緒つて。あのおじさん、真剣に走つてたわよ」

「僕も真剣に走つたよ」

砂糖もミルクも入れてかきまわしながら、顔を上げた。

「あの感じだと、あなた、あのおばさんの浮氣相手とか？」

「冗談のつもりで笑いながら言った。

君島は、何の反応もせずに、ただ浅井を見つめた。

「それと、間違われたとか……？」

君島は、にやりと笑つた。

「何？その笑いは？」

「うん。まあ、あれじゃ「まかしようがないよね」正解

浅井が絶句した。

「だから内緒つて言ったのにな」

君島はやはり笑つていた。

「なつ、なんで、人の奥さんなんか、あ、あの、出会うのが遅かつ

たつてやつ?」

思わず顔を近づけて小さな声で訊いた。

君島はフフフと笑う。目を伏せると長い睫毛がお人形のようだ。こんな可愛らしき子が、不倫?!

あの時のおばさんはどんな顔だつただひつ。思い出せない。思い出せないくらい凡庸な外見だつた。

どうしてそんなおばさんとこの天使のよつな子が、浅井が顔を顰めて考へてみると、君島が軽く答えた。

「そんなんじやないよ。

それに相手はあの人だけじやないしね

浅井は、絶句の上に息も止めてしまった。

「気にしないで。僕も相手も本気じゃないんだし」

君島は笑つて手をひらひらと振つた。

「お互い便利に使つてるだけなんだ」

浅井が首を振つた。

「どうして、そんな、」

「うん。楽だから」

「楽、だなんて、そんなはずないじやない」

「うん」

君島が一息ついて答えた。

「誰も束縛しないから、楽なんだ」

その言葉を少し考へた。束縛しないから楽。しかしそう考へるのを止めた。

「楽でもなんでも、そんなことなんにもこゝ」となんかないんだから、絶対やめなさい!」

君島はまた天使のように微笑んだ。

「僕のことなんか心配してないヒマないでしょ。もつすぐクリスマスなのに」

「「こまかす気なの？」

「だって僕、クリスマスの予定がないんだよ。浅井さんはあの彼氏と？」

「え、そうだけど」

「いいね。その袋は何かプレゼントなの？」

あっさりと話題を逸らされた。

そして君島が浅井の買った文庫本に興味を示したので、どうせマフラーを編み終わるまで読まないので貸すことにしてた。

それを少し離れたテーブルで、事務員が聞き耳を立てていた。さすがに内容までは聞き取れず、二人でコーヒーを飲んでいたことを確認できただけだ。

そしてそれはその夜には栗尾に報告されていた。

夜に、大沢から浅井に電話が入る。

会うようになつてから、つまり先週の土曜日から、毎晩定時に電話が入るようになつた。

明日は忘年会ですね。

そうね、そつちはみなさん参加? うん。社長も。本社は社長参加?

社長は確かに張り切ったかなあ。

そうなんだ。俺本社の社長ってみたことないかも。

そうね。私も何ヶ月も見てない気がする。

いや、そんな忘年会よりさ、クリスマスですよ。
え？

え？忘れてんの？

忘れてないけど、そういうえば詳しい予定は決めてないじゃない？

ああ、大丈夫です。俺が決めてます。

へえ。どんなの？

内緒です。

内緒？

あ、でもそんなに期待しないでください。

毎晩電話で会話しながら、避けていたる話題があつた。
大沢はあのバイクの男。浅井は君島のこと。

金曜日の夜は本社上げての忘年会が開催され、下請け業者もほとんどが参加した。

大沢も出席したのだが、くじ引きの席が栗尾の隣だつたのでまたしても栗尾に独占された。

同じく参加していた浅井もさすがにそれは気にはなつたのだが、まさか文句を言うわけにもいかない。

それに、この場でこの前のように一人で話してもきっと盛り上がりだらうし。

そんなふうに考えて浅井はなんとか納得する。

居酒屋での一次会が盛況に終わり、年配の上司たちと共にいつもなら浅井はここで離脱するのだが、

次はみんなでジガーレイに行くんんですけど、浅井さんも行きませんか？

と、同僚に誘われていてぐらついていた。

「ほら、この前のバイクの！覚えてないですか？」

と言われるまでもなく、浅井はジガーレイと言つ単語もしつかり記憶していた。

まだ早いですしね！行きましょう行きましょう…と腕をとられ、しそうがないわね、と了承した。

「あ。やっぱ浅井さん、行くんだ」

栗尾が大沢に聞こえるように呟いた。

「見かけによらず、浅井さんってすごいのよね

呆れたように首を傾げて笑つてみせた。

「すつごい若い子と、最近毎日会つてゐるんだつて。なんか、子供みたいな子？それなのに次はバーテンなのね。物足りないのかな？」

「知るかよ」

面白くない大沢は、はき捨てるように答えた。

「多分、名大つてどこがツボだつたのね。おばさんは若さと学歴にこだわるの！」

栗尾は大沢の学歴コンプレックスをよく知つていた。

人の弱味を探り当てる能力は天性のものがある。

そしてそれだけではなく、興信所の探偵と付き合ひがあり、頼めば軽く調査してくれる。

その探偵によれば、大沢の周囲は結構高学歴の人が多く、大沢だけがぽつんと高卒の資格すら持たない。コンプレックスを持たざるを得ない環境にいるのだ。

そして、軽く浅井の調査も済んでいた。

浅井は大沢のコンプレックスを充分刺激する経験を持つていた。

すつごい若い、子供みたいな子、とは多分、あの時の小僧だらう。大沢はいらいらしていた。

あの時の小僧と会うのはしちゃうがない。

腹は立つが、ある意味あの小僧が実際俺たちのキューピッドだつた。それは認める。

それだけのことなら会うのはしちゃうがない。

しかし、この後のバーは、余計だらう。

あのバーテンは、余計だらう？

ただ見かけただけの男に興味持つの？浅井さん。

大沢はそんなふうに、いろいろしていた。

しばらく歩いて到着したのは、繁華街から少し離れた街角の小さな一軒屋。中のライトが暗いせいか窓が琥珀色に見える。

ドアを開けると暗い店内に小さく鈴が鳴る。いらっしゃいませ、と確かに中々の男前が案内に来た。

「カウンターに行きましょうよ！」

と突然後ろから栗尾が浅井の腕を掴んで、ぐいぐいと進んでいった。

浅井は少し戸惑つたが、きっと酔っているんだろうな、と歯向かわすについていった。

大沢もその後ろを追つた。

店が小さいせいもあるのか、結構混んでいて席がそんなに空いてない。

ダーツのコーナーもあり、椅子のないスタンド席もあるので立つていてもいいようだ。

カウンターは2席しか空いていない。大沢があぶれた。

浅井もさすがにこの席を大沢に譲る気はなかつた。そこまでも人よじじゃない。

一次会で大沢が栗尾とずっとしゃべっていたことが、やはり浅井は面白くなかった。

この店にきてまでそんな姿を見せられなくてもいいでしょ。

浅井はそう思つていた。

大沢も腹を立てている。

そんなにカウンターがいいのか？俺を立たせたまでも？

大沢は少し酔つっていて、いらいらしていて、よく考えれば浅井に

原因はないのに、腹を立てていた。

そして少し位置が高いスタンドテーブルに腕を乗せて、目当てのバーテンを探した。

バーテンを探した。

カウンターの中には店員が一人いて、一人は接客中。

一人は横の作業台でオレンジを切っているところ。

そのオレンジを切っているメガネの店員が、かなりの長身だった。恐らく、彼。

切ったオレンジをグラスの口に差し、トレーに載せてフロアから戻ってきたイケメンに渡した。

それから新たな客3人の顔を確かめるように眺め、「ご注文は？」

と言った。

低い、掠れた声だ。

「私、スクリュードライバー！」

栗尾が、ついさっき彼がオレンジを差したカクテルを簡単に頼む。

「ホワイトレディ」

浅井もいつも好みを口にする。

大沢が口を開かなかつた。

「お客様は？」

バーテンが催促した。大沢はしばらくバーテンを睨んでから、言った。

「ビル

「バド、クアーズ、ハイネケン」

「クアーズ」

「はい」

バーテンが頷いた。

バーテンは作業時間の短いメニューから用意した。

まずビール、次にステアカクテルのスクリュードライバー、最後に浅井のホワイトレディ。

材料をシェイカーに入れて上部を合わせて蓋をし、両手で持ち上げたところで栗尾が質問した。

「バーテンさんって、名大の生徒さん？」

バーテンは長い指を広げて俯いたまま上目遣いで栗尾を見て、「そうです」と頷いた。

わ〜、す〜〜い、何部なの〜?と更に訊き出そうとするが、バーテンは作業中は口を開かないし、結構ぐるぐると細かい仕事も忙しそうにこなしているのでほぼ無視している。

大沢は敵意丸出しでバーテンを睨んでいた。

頭がよくて顔も声もいい。背も高い。もてるだらつ。あのバイクはいいアイテムだ。

さらにつらいらを増していた。

浅井も、バーテンを観察していた。

手先が器用で動きにそつがない。

端正な顔立ちが冷淡に見えるのは切れ長のつり目せいだらつ。少し長めの黒髪がメガネに掛かっている。そして恐ろしく、寡黙だな。

浅井は笑っていた。

バーテンがホワイトレディを作り終えて浅井の前にコースターと一緒に置く瞬間を目掛けて

再び栗尾が訊いた。

「バーテンさん、専攻は？」

バーテンがまた、栗尾をちらりと見て答えた。

「工学部です」

栗尾が笑つて、浅井を振り向き、大きな声を出した。

「えへ！奇遇ですね～浅井さん！」

浅井さんと同じ、名大工学部ですって！」

「名大・・・?」

大沢が、囁きのような掠れた声で繰り返した。
隣で顔色を失つて呆然としている浅井を覗き込んで、栗尾が笑つた。

「そう言つてましたよね～？浅井さん」

言つていない。

履歴書にも書かなかつた。
それをなぜ

「まじで？」

大沢が硬い作り笑顔で浅井に訊いた。
浅井はその顔も見ずに俯いていた。

思い出したくない。

話題にされたくない。

だから隠していた。

誰にも知られていないはずなのに。

笑つて「ごまかすタイミングも逸した浅井は、それでもなんとか笑みを作り、首を振りながら椅子から降りた。

やつぱり私は場違いだつたわね、という顔で財布から一枚札をしてカウンターに置いて去ろうとした。

直後に大沢の声がした。

「あんたさ、この前死んだネコ始末しただろ?」

周囲がシンと静まった。

浅井も驚いて振り向いた。

「国道で轢かれてぐちゃぐちゃになつたやつ」

えつ・・・と栗尾もひきつった顔で呟いた。

バーテンは無表情に大沢を見下ろし、いえ、と答えた。

「あんただよ。外に止まつてるバイク、あれだつたよ」

「違います」

やはり無表情にバーテンが首を振つた。

店内の全員が注目している。

天井のスピーカーからピアノ曲が流れていた。

浅井は全身が熱いような冷たいようないたたまれない気持ちになり、慌てて大沢の腕を引いた。

大沢はそれを振りきり、大きな声を出した。

「その手で、ネコ始末したんだろ?」

浅井がまた大沢の腕を掴んだ。

「その手で平氣で食いもん作つてんだ?」

大沢はもう浅井の手を振り払わなかつた。

それでも浅井は両手で強く掴んで、店の外に引っ張つていつた。

「なんてこと言つのー。」飲食店なのよ？営業妨害って言われてもおかしくないわ！」

店の入り口からも遠く離れた駐車場の角で浅井が大沢を叱り付けた。

「信じられない！ここだつてきつとうちの顧客なのよ？」

浅井の会社の業務内容は業務用厨房機器のリース、販売、修理、メンテナンス。

主に代理店を通して一般飲食店に設置されている。

大沢の仕事は修理メンテナンス。この店に来る可能性だつてある。「いくら酔つてたつてそのくらいの自覚もないなんて、」

大沢は無表情で聞き流している。

そんなに酔つてはいない。ただ、いらついてるだけ。

その衝動の延長で、目の前で真っ直ぐ大沢を見上げて怒つている浅井の両肩を掴んだ。

浅井が息を飲むと同時に、大沢がその腕を引き寄せて顔を近づけた。

浅井が顔を伏せて腕から逃れようともがくと、大沢が更に強く肩を掴みなおす。

「浅井さん」

大沢が名前を呼んだが、浅井は尚一層抵抗した。

何これ？

何？大沢君つてこんなことする人？

どういうこと？これ、どういう意味？

とまどいながらも、浅井はわずかに屈辱を感じていた。

たつた一回一緒に街を歩いただけで、どうしてこんな扱い？
なんでこんなに強く掴まれなきゃならない？

さつきバー・テンを罵ったことよりも、浅井は今掴まれている肩の
痛みで大沢を見損なっていた。

これだって暴力の一種だ。

唇を噛んで、力を入れてその両手を振り払った。

完全に拒絶されて、大沢が何かを言おうと息を吸つた。
その時力ちつと勝手口が開く音が聞こえ、誰かが出てくる気配が
したので、大沢は手を下ろして吸つた息を吐いた。

そして、出てきたのはヘルメットを下げた、あのバー・テン。

二人の姿は目に入つただろうに、バー・テンは顔も向けずに真つ直
ぐ駐輪所に向かつた。

とつさに浅井も大沢に目もくれずに、バー・テン目指して走り出しだ。

迫つてくる浅井の足音に気付いているだろうに、バー・テンは振り
向きもしない。

その浅井の後姿を大沢はしばらく眺めていた。
そしてとうとうバー・テンが浅井を振り向いたところで、踵を返し
た。

「お連れの人、店に戻りましたよ」
バーーテンが走つてくる浅井を振り向いて、一度目を動かしてから言つた。

「うん？いいの。一人で、来たんでもないし」
ちょっと走つただけで息が切れた。しかしまず謝らないと。

「さつきは、ごめんなさい。もしかして、叱られて、帰るといひっ？」

「いえ。元々この時間までです」

バーーテンがあつさり即答する。

「そう。それでも、あんなこと、ごめんなさい」

「いえ」

バーーテンは、会釈をして立ち去りつとした。

「あの」

浅井が呼び止めた。バーーテンが顔だけ向けた。

「猫のこと、訊いていい？」

バーーテンは、首を傾げてからまた歩き出した。だから浅井もその後について歩いた。

浅井はバーーテンのあの行動にずいぶん感動したのだ。
きっと動物好きの優しいお兄さんなんだろうと想像していたのに、
どうも様子が違う。

だからこそなおさら興味がわいた。

母校の後輩だといつことも、痛みと共に強く印象付けられた。

この無愛想な理系のバーーテンが、誰もが目を逸らした猫の最期を
引き受けたのはなぜなんだろう。
まだ少し荒い息を整えながら、訊いた。

「どうしてあそこまで、わざわざあんなことできたの？」

「バーテンは振り向かない。」

「だつてもう、生きてなかつたし、誰も助けられなかつたし、あんなことしても、」

そして到着した駐輪所でバーテンがヘルメットを置いたバイクは、ライムグリーンだった。

「通り過ぎたつてしようがないし、みんな嫌だなつて思いながら通り過ぎたと思うのに、」

バーテンがキーを回してセルを押した。

そして始動したエンジンを二三度吹かした。

安定したはずのエンジンがなんとも不規則な爆発音を繰り返す。バイクってこんなものなの？と気を取られていると、バーテンが

口を開いた。

「あそこ、よく通るんです」

バーテンがメガネを外した。

「気付かなかつたら通り過ぎたけど」

そう言つた後でヘルメットを被り

「気付いたのでああするしかなかつた」

シールドを開けてメガネをかけ、

「ああしなかつたらこの先あそこを通る度に後悔する」

グローブを嵌めてスタンドを蹴り上げ

「別に猫のためじやないです」

バイクをバックさせて駐輪所から出し、シートに跨つた。

「俺が不愉快だつた。それだけです」

それからヘルメットのシールドを下げる度に左足でシフトを落とし、浅井に会釈して走り去つた。

浅井はその姿をしばらく見送っていた。
バイクが交差点を右折して見えなくなつても、まだ立ち尽くしていた。

バーテンの答えは、期待以上だつた。

俺が不愉快。なんてシンプルな。

何の装飾も言い訳もない。だから、強い。

シンプルで単純なものが一番強い。どんな場合でも。

そんなことを改めて教わつた。

そうだ。私もシンプルに強くなる。

浅井はなんとなくそう思つて、笑つた。

その浅井を、店から出てきた大沢と、それについてきた栗尾が見ていた。

そして浅井が振り返って店に戻る前に立ち去った。

「浅井さんって、年下が好みなのね。大沢君も気をつけなきや！」
二人のことを知つていて、栗尾が警告する。

「でも若いつてだけで好みに全然共通点がないのよね。大沢君だって若いんだから毒牙にやられちゃうわよ！」

鬱陶しいな、と大沢が言いかけた時に、栗尾が声を潜めて続けた。

「でも、気持ちはわかるわよ。だつて最初の彼と不幸な別れ方したじゃない？もう年上が怖いって思つてもしちゃうがないのよね」

探偵に頼んでいた浅井の調査がこんなに早く届いたのは、新聞に名前が載つていたからだ。

生まれ故郷での詳細な調査はまた後になるが、今回の報告だけでも浅井の衝撃的な過去が明らかになり、栗尾は満足していた。ただしの嫉妬は感じていた。

悲劇のヒロインのような物語に。

「情熱的だつたのよね。浅井さん、若い頃は」

大沢は驚いていた。

自分には内緒と言つて隠した過去を、栗尾には伝えている？

「浅井さん、今でも好きなんだと思つわ。だって今でもその時の彼の話、よくするもの」

もちろん嘘だ。浅井は過去の話を一度もしたことがない。こんなに激しく美しい過去を持ちながら、一人で秘めている。そのことすら美しい。

そして栗尾にはそれが許せない。

そのまま陶酔をぐぢやぐぢやに踏み潰してやる。

大沢を別の店に誘い、栗尾は滔々と浅井の過去を物語つた。それを拒む勇気は、大沢にはなかつた。

週末だと言づのに大沢からの連絡がない。

クリスマスまであと10日。

浅井はコタツに入つて赤いマフラーを編んでいる。

昨夜は大沢と栗尾が先に店から消えた。

同行した全員が実は大沢と浅井のことを知つていて、それを知らない素振りをしていて、しかも栗尾の大沢に対するアプローチも周知の事実で、その二人が早々に消えたということをサカナにこの後も飲みたいのに、浅井の前で口にできる話題ではない。

他に話題がないだけでなく非常に会話もぎこちなくなり、そのまま盛り下がつて忘年会はお開きとなつた。

浅井はその後何度も大沢の携帯に連絡したが、電源が入つていないと返されるだけだつた。

いらいらしながら編み目を増やしている。

考えたくないと思いながらも他に思いつくこともない。

栗尾さんと一人で消える？

大沢君、否定してたわよね？

そうじやないのなら最初から言えぱいいだけのことじやないの。胸の中でブツブツと文句を言いながら編み目を増やしている。

それよりも栗尾が浅井の隠している過去を知つていいことが不気味だつた。

なぜ知つているのか、何をどこまで知つているのか、何が目的なのか。

わかるはずもなくブツブツと悩みながら編み田を増やしていく。

だけど、何を言われても無視しよう。
どんなふうに引っ掛けられても、先輩のことは口にしない。
あんなふうに、酔つたはずみで話題にするような、
先輩はそんな人じやない。

悔しくてたまらない気持ちをこなすために、浅井は編み田を増やしている。

ブツブツとマフラーを伸ばしていると、コタツの上に乗せた携帯が鳴った。

すぐに取り耳に当てるど、

「ごめん。君島です。今いい？」

と高い声が聞こえた。

浅井は思わず笑つて、ベッドに背中をもたれて答えた。

「うん。いいよ。今一人だし」

「え？ 一人？ なんで？ 土曜日なのに？」

声を上げて笑つてしまつた。

「あなただつて土曜日にどうしたのよ？ たくさんいる彼女は？」

納得はしていないものの、事実なので君島に突きつけると

「だからさ。彼女たちには亭主とか彼氏とかがいるんだよ。基本的に僕は土田フリーなの」

呆れて天井を見上げた。

「あれ？ もしも～し！」

言葉がないよ、君島君。と、また浅井は笑つた。

「あはは。言葉がない？」

君島君と付き合つたちは、寂しいのかも知れない。

笑いながら浅井は思つた。

見捨てられた自分をごまかしたくて、君島君を利用しているんじやないだろうか。

そういう気持ちはあるのではないか。

「浅井さん、ヒマなら出でこない？」

私が今君島君に会いたい気持ちと、何が違う?だとしたら、会えない。

「この前借りた本、面白いね」

会う理由がない。

「続きを読むみたいんだけど、自分で買つ気にはならないんだよね
だつて私たちは、

「浅井さん、買つでしょ? 今日買つて先に僕に貸して」

・・・・・は?

「じゃないと借りた本返さないよ」

つっかり爆笑した。

完璧な理由を作られてしまつた。

これじゃしようがなく会いに行くしかないじゃない。
なんて上手なんだろう。

もしかしたら君島君の彼女たちも、いつもひつて引きずられたんじ
やないだろうか?

君島君は、お互に利用しているのだと言つた。

私もその一人になるのだろうか?

それは、悪いことだろうか?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1013y/>

J O Y

2011年11月20日03時16分発行